

笑顔を取り戻す手助けに

プロフィール

60歳以上の人を対象にした健康増進教室を担当する鍼灸師の1人。趣味は合気道と温泉に入ること。高崎市鍼灸師会の会長。片岡町在住。67歳

「はり先生こんにちは」。5歳の男の子が元気よく入ってくる。菅野さんは市内ではただ一人、小児はりもする鍼灸師。やつてくるのは乳児から高齢者まで。子どもは針を刺さず、さするように刺激する。「気持ち良い」と子どもたちが笑顔になる。

「中国の針は太くて痛い」という。日本の針は髪の毛ほどの細さで刺すのは1〜2ミリ。痛みはほとんどない。「効果があるなら痛くない方が良いでしょう」

鍼灸師になったのは38年前。大学卒業後、高崎の福祉施設に勤務した。福祉の仕事は好きだったが、自分しかできないやりがいのある仕事他にないかと考えるようになる。そんな時、針の効果に感動したアメリカの記者の記事を目にした。「これだ」と思った。



3年間勤めた福祉施設を退職し、はり・きゅうの学校へ。勉強を重ねて国家試験に合格した。翌年、観音山の麓に治療院を構えた。開院はしたが待てど暮らせどお客が来ない。「切羽詰まると人間何でもするもんです」。仕出し弁当のアルバイトで日々の暮らしをしのいだ。そんな折、高崎で初めてヨガの教室が始まると聞いて参加した。気が付けばヨガを教えるまでになっていた。鍼灸師とヨガ講師の二つの顔を持つ。

20年前ヨガの修行でインドへ。近所に住んでいた子どもから「マザー・テレサに渡して」と手紙を託され、カルカッタの修道院を訪ねた。そこで思いがけず、マザー・テレサ本人に会うことができた。「悩んでいる人を助けてあげなさい。待っていないでお願いしますよ」と

声かけられた。今でもこの言葉が心に刻まれている。これが後押しになった。はり・きゅうを知ってもらうには、気持ち良さを体感してもらうのが一番良い。「待つていないで外に出て行こう」とイベントや人が集まるところで無料体験を開催した。

歳をとると、ひざや腰など体のあちこちに痛みが出る。健康維持や予防のために、自分でできる簡単なはりやお灸のやり方を教えたかどうか。仲間の鍼灸師と一緒に高齢者向けの講座もやってみることにした。

針の師匠からは「皮膚を読みなさい」と教えられた。愛情をもって触り、手当てする。「来た時よりも元気になってもらいたい」。辛い症状を抱えている人を笑顔にしたいと今日も奮闘している。

